

様式 2 【生活様式などの無形のもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP 公開 (可・否)

区 分	1.森づくり 4.森と暮らし	2 森の恵み 5.森の文化財	3.森と技 6.森の風景
分野 (ふりがな)	(分野) 茅屋根葺き		(ふりがな) かややねふき
地域独特の呼び方	ヤネフキ (屋根葺き)		
タイトル	出稼ぎの屋根葺き職人		
伝承地域	南相馬市鹿島区		
由 来	<p>相馬地方の茅屋根は昭和初期ころまで、会津の「山三郷」と呼ばれた西会津町、山都町など耶麻郡西部からきた多くの屋根葺き職人によって葺かれていた。会津から来た屋根葺き職人は5、6人が組になり鹿島町内に泊まりながら村を廻って屋根を葺き歩いた。屋根葺きを請け負うと屋根を葺く家で朝食をとり、帰りもその家で風呂に入って夕食をとって宿にもどる。会津の屋根葺き職人のなかには万歳 (会津万歳) をする人もいたという。</p> <p>屋根葺きは田植終わりと、秋のスルス挽きが終わってからの冬から春先の農閑期に多く、出稼ぎであった。渡り職人もおり、会津や山形方面からの職人が入っており、渡り職人は仁義をきって仕事を頼んできたという。</p> <p>相馬郡鹿島町(現南相馬市鹿島区)烏崎は屋根葺き職人も多い地区で、屋根葺きの系譜をたどると、会津の屋根葺き職人が定住したと思われる屋根屋も少なくない。</p> <p>会津から来た屋根葺き職人と地元の職人が一緒に仕事をする場合も多かったといい、とくに地元の職人ばかりで葺くことを「地屋根」などと呼んだ。</p>		
内 容	<p>屋根葺きには「ころむき」と「刺茅 (さしがや)」の二つの方法がある。ころむきは仕事は早く終わるが大人数が必要である。一方、刺茅は合わせていくので時間はかかるが小人数でできた。屋根葺きをするときは隣近所で手伝いあい、ころむきは職人一人に3人の手伝いが必要なので職人7、8人に下働き20人ほど必要とされた。刺茅は一人でもよい。</p>		

	<p>屋根の葺き初めを「帳場はじめ」といい、塩と水で清めてから始めることが多い。初めに使う茅の量を決める「茅ごせ」をする。作業は足場を組む足場掛けから行い、下地作りに入る。2尺間隔にオシボコを横に結わえ、次に1尺置きにタルキの竹を下の棒に当ててコデ縄で縛る。軒先にはヨシを1尺5寸くらいに切り揃えて並べることもある。</p> <p>平葺きといって平面を葺く。軒先の1段目にはドウギリといって古茅を2尺くらいに切ったものを使う。2段目は新しい茅を切ったウラ茅というふうに葺き上げ、4段目はアテ茅といって新しい長い茅で葺く。7段あがるとグシまで葺きあがり、2日目くらいで「葺き止め」になる。最後はヌキヅケといい一日がかりで葺く。葺く場合にはサツテ棒で叩きながら均し、箒で掃き、再びサツテ棒で叩くということを繰り返す。</p> <p>グシは瓦グシが多いが、杉皮、簀（すだれ）グシ、トタンなどもある。グシの西側には「寿」、東側には「水」と刻む。</p> <p>葺きあがるとグシ祭りをする。塩と水、米をあげ、親方が屋根缺で幣束を切って拝み、33個のグシ餅を撒く。</p>
文化財等の指定状況	
問い合わせ先	『鹿島町史6 民俗編』（2004年3月 鹿島町）

【継承活動を行っている方がいる場合】

個	氏名（ふりがな）			※顔写真ありましたら、コピーか電子ファイルをご恵願います。
	性別・年齢	男 ・ 女		
	生年月日	明治・大正・昭和・平成	年生	
	住所・電話	〒	電話	
	職業			
団体	団体名（ふりがな）			
	代表者氏名（ふりがな）			
	団体の設立年月日	明治・大正・昭和・平成	年	月 日
	問い合わせ先	電話		

【フリーフォーマット】※表面に記載した内容に関連したことを自由に記入してください。

キーワード

※活動の様子が分かる資料等があればコピーを1部ご恵与ください。